論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号

氏　　名　　張　名　揚

論 文 題 目

『喫茶養生記』に見える宗教思想
——道教との関わりを中心に——

論文審査担当者

主査　名古屋大学教授　神塚淑子

委員　名古屋大学教授　吉田　純

委員　名古屋大学教授　阿部泰郎

委員　東京学芸大学教授　高橋忠彦

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、日本最初の茶書とされる栄西の『喫茶養生記』に関して、中国宗教思想史の視点から見て重要と考えられる問題を取り上げ、検討を加えたものである。

まず、第一章の前半では、中国で著された二つの栄西伝、南宋の虞樗「日本国千光法師祠堂記」と明の如蘭「洛城東山建仁禅寺開山始祖明庵西公塔銘」によって、中国側で知られていた栄西の人物像を確認するとともに、近年発見された『隠語集』を通じて、異文化受容における栄西の柔軟性を指摘する。第一章後半は、『喫茶養生記』の思想的特色を考察し、全般的に中国の神仙・道教思想や医学書との関連が深く、とりわけ桑のことを説く下巻の方にその傾向が濃厚であるとする。また、『喫茶養生記』の初治本と再治本の相違にも注目し、初治本の方に神仙・道教思想概念がより多く見られることを指摘する。

第二章では、『喫茶養生記』上巻で強調されている茶の苦味が心臓に良いという理論について、その源流を中国古代文献に遡って考察する。『喫茶養生記』で『尊勝陀羅尼破地獄儀軌秘鈔』の引用として説かれる五臓と五味の関係は、『周礼』天官・食医や『黄帝内経素問』などに見える内容と同じであり、中国古代の医学理論における五行配当を中国仏教が取り入れたものであったこと、また、茶を「養生の仙薬」「延齢の妙術」とする『喫茶養生記』の記述は、『神農本草経』に見える「苦菜」を上薬と位置づける考え方に近いことなどを述べる。

第三章では、『太平御覧』巻八六七「飲食部・茗」に収載された文のうち、天台山の茶に関わる記述を取り出して検討し、天台山の丹丘と羽人、大茗の服用と羽化登仙という観念の成立は東晋頃まで遡ることができると推論する。天台山のことを特に取り上げるのは、栄西は入宋中、天台山の万年寺に滞在し、石橋の羅漢に茶を献じたとされ、栄西における茶の問題を考える場合、見逃すことのできない場所であることによる。

第四章では、茶を祭祀の供物として用いることが魏晋南北朝期から唐代の道教において行われていたことを、『北帝七元紫庭延生秘訣』と『太上赤文洞神三籙』によって確認し、それは人の寿命を司ると考えられた北斗七星の信仰と、茶の持つ治病の効能に基づくと考えられること、また、密教経典の『梵天火羅九曜』や『七曜星辰別行法』などと類似する点が見られることを指摘する。

第五章では、『喫茶養生記』にもその著述の一部が引用され、中国の本草学・道教史の上で重要な人物である陶弘景が茶をどのように認識していたのかを、『真誥』や『本草集注』など陶弘景の手を経たことが確実な資料によって考察し、陶弘景は悪瘡治療など茶の医学的効能を重視していたことを指摘する。

最後に附録として、中国で著された上記の二つの栄西伝についての訳注稿を掲載する。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

栄西の『喫茶養生記』は、二度にわたる入宋体験をもとに、中国の医療を日本に紹介して喫茶による健康増進をはかろうとする目的を持って著されたもので、茶の効能を説く上巻と桑による治病を説く下巻から成り、その記述は密教文献や『太平御覧』『大観本草』などからの引用が大部分を占めている。本論文の特色は、『喫茶養生記』の記述を、中国の茶文化とそれを支える諸思想にまで遡って考察しようとした点にある。

本論文で取り上げられた問題は、食養生の観念と茶、天台山における茶、道教経典に見える供物としての茶、道士であり本草学者であった陶弘景における茶の認識などであるが、いずれも『喫茶養生記』と密接に関連している。食養生の観念は五臓―五行―五味の対応関係の中で茶の効能を説く『喫茶養生記』の論理と関わり、天台山は栄西が修行をした場所である。供物としての茶のことは『喫茶養生記』に説かれるとともに、栄西自身、天台山石橋で羅漢に茶の供養を行ったことがあり、陶弘景の著述は『喫茶養生記』に引用されている。このように、『喫茶養生記』と深く関わる中国茶文化の論理・トポス・儀礼・人物に焦点を当て、中国宗教思想の側から『喫茶養生記』を立体的に読み解こうとした本論文の姿勢は、一つの試みとして注目される。

本論文の中で、特に優れた論述が見られるのは、道教において茶が供物として用いられる早期の例を考察した第四章である。魏晋南北朝期から唐代の成立と考えられる『北帝七元紫庭延生秘訣』と『太上赤文洞神三籙』という二つの道教経典の中に、北斗七星信仰と結びつく形で茶を供物として用いる例が見えることを指摘し、それを密教経典の記述と比較することによって、密教における供物としての茶の儀礼は道教から受け継がれたものであることを精緻に論証している。これは本論文の創見として評価できる。天台山の茶について述べた第三章も、霊地天台山と神仙思想と茶という三者の結びつきがどのように形成されていったかを、古い事例を中心に丹念に調べている。

ただし、本論文にはいくつかの問題点もある。論者の関心は中国茶文化の古層の部分に偏っているが、もっと栄西に近い時代のことも取り上げるべきであったこと、論者は茶と神仙・道教思想との結びつきを強調するが、栄西自身の意識の中では大きな部分を占めていた密教思想についてもっと言及すべきであったこと、資料読解の誤りや論証の不十分な箇所がいくつか見られること、日本語の論文として文章表現に改善の余地があることなどがそれである。しかし、これらは、今後の研鑽の中で克服可能なものであり、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を与えるにふさわしいものと判定した。